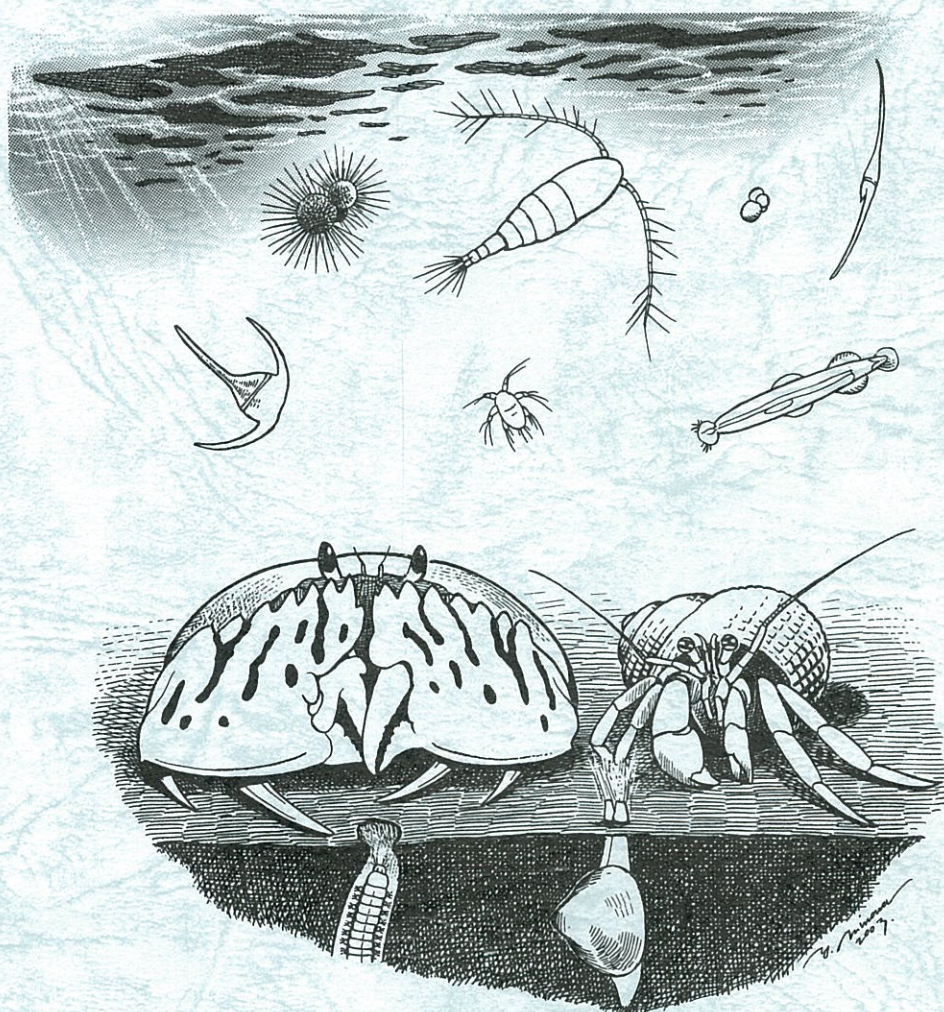


2003年
日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会

*The Plankton Society of Japan and The Japanese Association of Benthology
Joint Meeting in 2003*



November 22-24, 2003
Tokyo University of Marine Science and Technology

2003年11月22-24日 東京海洋大学

日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会実行委員会

日本には2型（種？）のベニクラゲ（ヒドロ虫綱、花クラゲ目）がいる
—両者は“若返り”可能

久保田 信

京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所

わが国で約100年前から知られるベニクラゲ *Turritopsis nuturricula* MaCradly は、主として北海道から中部日本にかけての材料で系統分類学的研究が進められ、その生活史も1971年に山田・長尾両先生により解明された。ところが、近年、演者が南西諸島から中部日本にかけて野外から採集した材料およびそれらを実験室で飼育して研究を重ねてきた結果、北日本のものとは形態的にも生活史も異なる新しい型が発見された。このいわゆる“南日本型”の特徴は、(1) 傘径が数mm程度の小型のサイズで成熟すること、(2) 触手数が80本以下と少なく、傘縁での配列が1環列と単純であること、(3) 放卵放精型でプラヌラ幼生を保育しないこと、が3大特徴であることが判明した。ところで、このような南日本型のベニクラゲは、“不老不死”の可能性を秘めていることもわかった。南日本各地の材料での実験室での観察結果、どの発育段階でも死ぬことなくクラゲ世代（有性世代）は、そのもう一つ前の段階であるポリプ世代（無性世代）へ“若返り”を起こすことを100%の率ではないものの確認できた。この“若返り”は、南日本型と形態的に近い地中海イタリア産のベニクラゲでの世界初の発見・報告（1996年）に続くものである。一方、北日本産の大型のベニクラゲでも、昨年に初めて“若返り”の能力があることを確認した。若返り能力に両者で多少の差がみられはしたものの、北日本と南日本のベニクラゲの上記のような形態差と生活史の相違は、両者が種内の型にとどまらず、種レベルで異なっている可能性もある。

Shin Kubota

Two types (species?) of *Turritopsis nutricula* (Hydrozoa, Anthomedusae) are discriminated in Japanese waters from the morphological and life historical point of view — Both types have capability of reversal to the young developmental stage of the hydroid from the medusa